

教育実習事前指導科目（教育実地研究入門Ⅱ）への取組から

全学教職センター専任教員 五島 浩一

今年度は、主に、教育学部とそれ以外の学部の教育実習に関わる事前指導・事後指導の担当及び教育支援ボランティア活動への学生の派遣を担当した。その中で、教育学部で実施している教育実習の事前指導に相当する授業科目の「教育実地研究入門Ⅱ」について述べてみたい。

「教育実地研究入門Ⅱ」は2年次を対象とし、年間を通して実施する講義と水戸市内の小・中学校を訪問し観察、参加する体験活動を組み合わせた授業として展開した。

講義では、教職に関する基礎的な知識を確認し、他の教職に関する授業での学びと統合させて新たな学びを獲得することをねらいとした。具体的には、「学校とはどのようなところか」「教師の仕事はどのようなものか」「子ども理解と生徒指導の在り方」「学習指導の在り方」「これからの教師に求められるもの」などのテーマに沿って実施した。

学校訪問は、水戸市教育委員会や水戸市学校長会の協力を得て、6月、7月、10月、11月の計4回実施した。学生は毎回違う学校を訪問するようにし、小学校、中学校、大規模校、小規模校など、さまざまな学校現場にふれることで、学校というものの捉え方を深め、教育、教師、子どもに関する実感を伴った理解を深めることをねらった。

この授業の最後にまとめとして書いたレポートの中に次のような記述があった。

私はこの授業を通して「教師とは何か、どうあるべきか」ということはもちろん、「私が教師になったら」ということについてたくさん考えた。

小さい頃から、何となく先生になりたいと思っていた。小・中・高とさまざまな先生と接して「なんとなく」がだんだん現実的な目標になり、教育学部を選択した。教育について、学校について、子どもについて、教師について、自分では考えていたつもりだった。しかし、この授業で学習指導について考えたり、学校訪問で生の授業や子どもたちの様子を見たりして、私はもっと教師というものに真摯に向き合わなければいけないと感じた。

（中略）

私が子どもたちに関わることで、子どもたちの時間を無駄にはしたくない。教師が子どもの可能性を潰すようなことがあってはならない。やはり教師は恐ろしい存在である。この授業を通して改めて感じたし、生半可な気持ちではいけないと思った。授業のテクニックや子どもとの付き合い方など、ほとんどのことは実際現場に出てみないと分からないし、身に付かないと思う。だからせめて、今の私にできることは、教師という存在について考え、向き合っていくことなのだ。と学んだ。

学んできたことを学校で実際に見て確かめたり、自分でも教育活動の一部に参加したりすることで、多くの学生は、今までの学びを振り返り自分自身を見つめ直すことができたようだ。実際の教育現場の現実を知ること、教師を目指す気持ちがより強くなったり、逆に不安が大きくなったりする学生も見られた。いずれにしても、教育実習前に教職というものについて改めて深く考える貴重な機会になった。